

ドレッサージュホースに育てよう!



㊦ ピアッフェ・パッサージュ Part 4

今年の関東の夏は、雨が多く涼しい日々が続きました。暑い日にはハードなトレーニングができないため、良いチャンスだったのですが、オースミレブンの肢が悪化してしまい、症状が思ったよりも重症であることが判明、今後、競技馬としての復帰は難しいかもしれないとの診断がなされました。ここまでの道のりを振り返り、とても悔しく途方に暮れています。しかしながら、今後は肢をできるだけ休ませながら、完治することはないにしても馬と相談しながら継続できる可能性を探っていきたいと思います。

これまで積み上げてきた調教で、グランプリへの道が見えていただけに残念です。今月以降の連載は、ここまでの過程を振り返りながらピアッフェと歩毎踏歩変換についてまとめ、今年限りで終了することになります。

ピアッフェ

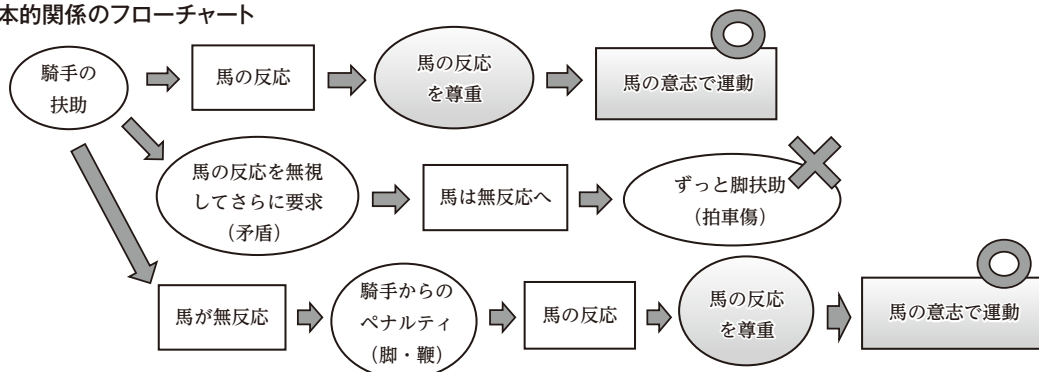
ピアッフェについてまとめる前に、馬を調教する上で絶対的に確認しておきたいことがあります。

それは、「全ての運動は馬が自らの意志で行うようにする」ということです。騎手は何も知らない馬に対し、どのように運動をすれば良いのかを正しく調教します。ピアッフェにかかわらず各運動をするために、正しい体勢やタイミングを調教し、その馬と築き上げた合図（扶助）で運動をする“きっかけ”を騎手与えます。その“きっかけ”の後には、それらの運動を止めてもいいという合図を出すまで、馬が自ら運動することを楽しむ環境を騎手が作らなければなりません。しかし、調教の過程で、無理な体勢のまま推進を与えたり、馬が矛盾と感ずることを続けられれば、馬自身はその運動が嫌いになります。それは、ピアッフェやパッサージュのように難しい運動だけではなく、単なるウォームアップから馬が矛盾と感ずれば同じことになります。

多くの騎手は「騎手が思うような運動を常に馬にさせようと扶助を出し続ける」ようにしてしまいます。単に前に進むということでさえ、馬が既に前に進んでいるのに、騎手から常に脚扶助を使われてしまうことになります。そうすれば、馬はその扶助に対し「最初の合図で前に進んだのに、全く認めてもらえないだけでなく、さらに強く脚で圧迫される……。何を求めているの？ それじゃあ、その脚扶助は無視していいの？ 何をすればいいの？」と混乱し、騎手の扶助に反抗する馬も出てきます。そうして騎手の脚扶助→馬は無視→騎手のさらに強い脚と継続的扶助→拍車傷……という最悪のスパイラルにも入っていきます。馬はますます脚扶助に鈍感になり“重たい馬”という人間の勝手な烙印を押されてしまいます。

我々は、騎乗中常に、騎手の正しい扶助→馬の反応を待つ→馬の反応→馬の反応を尊重（愛撫）→馬が自ら運動するというほんの数秒の駆け引きをするべきです。①馬に矛盾を与えないこと、②馬の反応を尊重すること、③最終的に運動するのは馬の意志であること、この3つを調教上の信念として持ち合わせていない騎手は、馬を正しい道に導くことはできません。我々は馬を制圧するのではなく、馬をガイドする役目を担っています。主役は馬です。馬が気持ち良く運動できないのは、それまでの騎手のガイドが全て間違っていると考えるべきです。特にこれからまとめる《ピアッフェ》においては、馬の気持ち非常に大切になります。馬が自主的に前進しようとする意志を尊重し、矛盾のない扶助によって透過性を作り、そしてそれら全ての要素が融合して初めてピアッフェという一つの芸術品が生まれます。

馬との基本的関係のフローチャート



上記の馬との関係を前提として、ピアッフェという運動を考えていきます。ピアッフェは馬にとっては混乱しやすい運動です。特に調教を始めるアプローチは、矛盾に近い要求があります。それは、前進と半停止がミックスされるということです。この運動をするまでに、馬に対し矛盾や苦痛を与えずに調教を進めてきたかどうかということもかかわってきます。

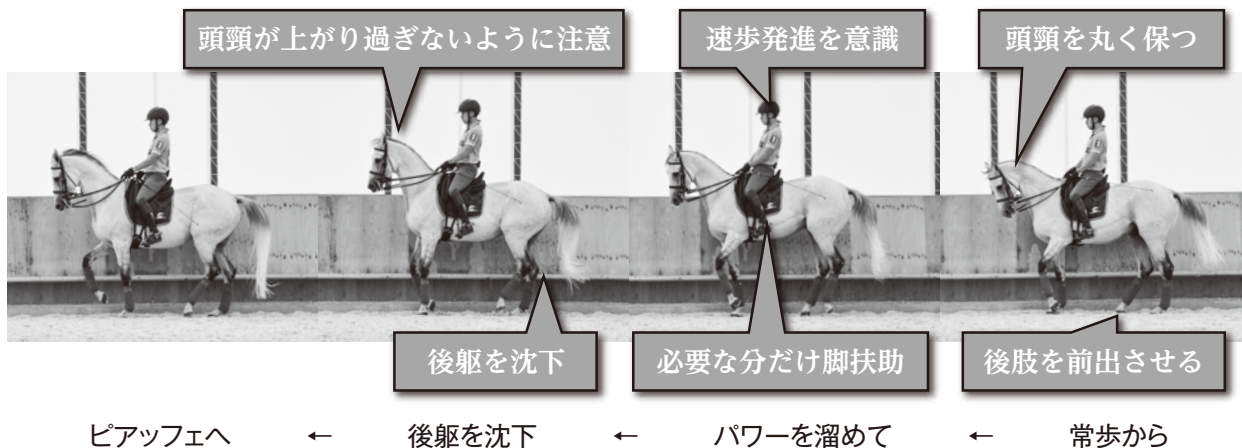
ピアッフェを調教する最初の方法は大きく二つあり、最終的にどちらの方法も行いますが、①の方法から始めます。

① 常歩をさらに収縮しながら、速歩発進の補助を出してすぐに減却する（推進は継続）

収縮常歩をしながら推進を増していきます。同時に透過性を維持するために頭頸を丸めます。その両方を強めていきながら、速歩発進の補助とリズムを作ります。馬が実際に速歩をしようとしたらすぐに半減却を使い、あくまで速歩発進の入り口までを続けるという意識です。

② パッセージを徐々に詰めていく（推進は継続）

パッセージから少しずつその歩幅を詰めていきながら透過性を維持します。収縮度を高めながら前進する意欲を維持して後躯の沈下を促します。



ピアッフェ実施扶助の手順

ピアッフェを調教、または実施する時の騎手の扶助手順を説明したいと思います。

まず、常歩をしながら収縮していきます。後肢をしっかり踏み込ませ（脚扶助）元気に歩かせながら、頭頸は丸めます（手綱扶助）。常歩をゆっくりとしながらも前進の指示を出し、半減却の状態を作り出します。推進力が馬体に充満している状態にするために、時には強い脚や鞭の刺激を与える必要がある馬もいるでしょう。

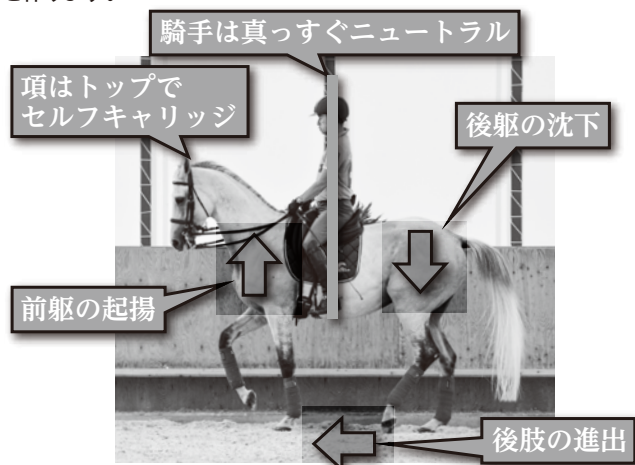
次の段階は、半減却で馬が前進意欲を維持してパワーが溜まっている状態の常歩から2拍子の速歩リズムに移行することです。ピアッフェは、その場で行う速歩です。扶助としては、常歩から速歩に移行しますが、速歩をするために脚扶助で押し出し、手綱は頭頸を丸く保つコンタクトを持ち、騎座は速歩のリズムに合わせてしようとしながらも、上半身がやや後ろに残って、前に行こうとする馬を抑えるようにします。これにより後躯の沈下が導き出されます。しかし、騎手の上体を後ろにすることは調教上の“きっかけ”でしかありません。馬が求められていることを理解してくれば、騎手の上体は垂直に保ち、ニュートラルの状態に戻すようにします。これは、脚扶助と同じで、動く合図を馬に脚で送り、それに反応したらいつまでも脚を使わないことと同じです。騎座や体重の扶助も、騎手が求めることに馬が理解を示せば、すぐにニュートラルに戻します。そして、足りない時にまた“きっかけ”を与えて反応させるというサイクルを作ります。

ピアッフェを実施する上で必要な要件は、

- ・透過性（スルーネス）
- ・コレクション
- ・馬の運動意欲（インパルジョン）
- ・後躯の沈下

などが考えられます。できるだけシンプルにリストアップしました。なぜなら、ピアッフェ＝難しい運動というように騎手が考えすぎることによって、扶助が複雑化し馬が混乱して、できるものもできなくなってしまうからです。

今回は現実に則したピアッフェに関する問題点を考え、今連載最後の項目になる1歩毎の連続踏歩変換についてまとめていきたいと思います。



オースミイレブンのピアッフェ・パッセージの動画がYouTubeで見られます！

YouTube > オースミイレブン ピアッフェ・パッセージ [検索](#)